

## 草地の更新

牧草の収量は経年化にともなって減少していくので、やがて更新が必要になります。これに対応する草地の更新指標（天北地域の鈹質土）は、土壌の化学性としてpH（H20）、理学性として固相率または硬度、植生状況として各草種ごとの冠部被度および収量による評価点で決められています。

天北地域における草地の基盤となる土壌は、その性質の違いから鈹質土、泥炭土に大きく分けられ、次のように草地更新の方法が異なります。

### 鈹質土および泥炭土草地の特徴と更新時の留意事項

土壌	土壌の特徴	更新時の留意事項
鈹質土	<ul style="list-style-type: none"> <li>○土性が細粒で堅密になりやすく、固相率が高い。このため、多雨による過湿、寡雨による干ばつは牧草の生育停滞を招く。</li> <li>○土壌の腐植含量が少なく緩衝力が小さい。</li> <li>○リン酸肥沃度が低い。また、経年化にともない酸性化しやすい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○保水力、固相率、透排水性の改善を図るため、十分量のきゅう肥施用</li> <li>○石灰質・リン酸質の土壌改良資材の適正施用</li> <li>○前年秋に播種床を造成し、早春播種</li> </ul>
泥炭土	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ヨシ、スゲ、ミズゴケなどの植物遺体からなる有機質土壌で、地下水位が高く、排水不良地が多い。また、固相率がきわめて小さく、地耐力が小さい。</li> <li>○草地としての利用過程で有機質が分解し、相対的に地下水位の高まりと、不等沈下の発生で、草地の利用効率が低下する。</li> <li>○有機質土壌のため強酸性を呈し、また、緩衝力が大きいため酸性矯正には多量の石灰質資材の施用が必要。</li> <li>○リン酸・カリ肥沃度が低い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○好適な地下水位（60cm内外）の維持</li> <li>○客土による地耐力（貫入抵抗値5kg/cm<sup>2</sup>以上）と養分保持力の向上</li> <li>○地耐力維持のために攪拌耕起（15cm）が望ましい。</li> <li>○石灰質・リン酸質の土壌改良資材の適正施用、きゅう肥の活用</li> <li>○播種は乾燥期を避ける。</li> <li>○地下茎型雑草抑圧対策として耕起前の除草剤使用が効果的</li> </ul>

注）固相率：容積当たりの土壌容量割合  
 （鈹質土40%程度）  
 （泥炭土20%程度）  
 （泥炭土20%程度）



## 草地の利用目的と導入草種

牧草地の利用方法は採草と放牧の2つに大別されます。したがって、草地を更新するときはそれぞれの用途に適した草種を選ぶことが重要です。

## 主な草種の使い方

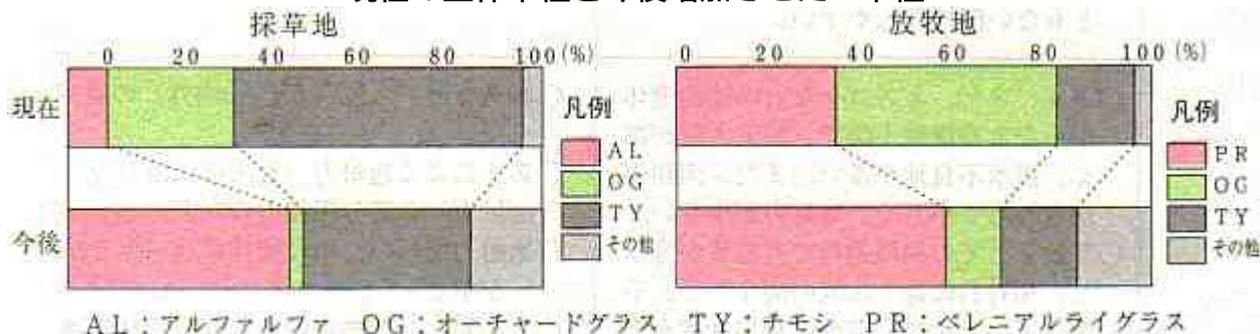
主な草種名	採草	放牧	
チモシー	○	△	<b>凡例</b> ◎：最適 ○：適 △：多少問題あり ×：不適
オーチャードグラス	○	○	
ペレニアルライグラス	△	◎	
アカクローバ	○	×	
シロクローバ	○	○	
アルファルファ	◎	×	

## 天北地域の酪農家における草地の主体草種と今後の意向

(天北農試 1995年)

現状における採草地の主体草種はチモシーが最も多く、次いでオーチャードグラス、アルファルファとなっています。放牧地はオーチャードグラスが最も多く、次いでペレニアルライグラス、チモシーとなっています。これに対して、今後増加したい草種をみると採草地ではアルファルファ、放牧地ではペレニアルライグラスが最も多く、草種の利用目的とも一致しています。なお、それを実現するためには草地の更新が必要です。

現在の主体草種と今後増加させたい草種



### 牧草科より

#### 放牧用ペレニアルライグラス新品種開発中

ペレニアルライグラスはチモシーおよびオーチャードグラスのように馴染みのある牧草ではありませんが、嗜好性が高く、高密度草地で季節生産性が良好であるなど、集約放牧に適するという特性から、近年道北地域を中心として栽培面積が急増しています。ペレニアルライグラスの優良品種はほとんどが外国産であり、北海道の気候風土に適する道産品種が望まれています。

当科ではこのペレニアルライグラスの新品種開発に向けて研究を進めており、平成7年度から系統の地域適応性試験が開始され、天北農試で育成される品種の誕生が期待されています。

その他、各種牧草およびサイレージ用とうもろこしの優良品種選定も実施しています。